

氏名	横内 裕一郎
学位の種類	博士（言語学）
学位記番号	博 甲 第 8 7 8 6 号
学位授与年月日	平成 3 0 年 7 月 3 1 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	<b>Effects of Task Conditions on Spoken Performance in Retelling</b> (再話におけるタスク条件が発話にもたらす影響)

主査	筑波大学	教授	Ed.D. (教育学)	平井 明代
副査	筑波大学	教授		磐崎 弘貞
副査	筑波大学	教授		久保田 章
副査	茨城大学	准教授	Ph.D. (教育学)	齋藤 英敏

## 論文の要旨

本論文は、再話課題のタスク条件がスピーキングパフォーマンスにもたらす影響を明らかにすることを目的としている。再話課題に焦点を当てた理由として、次の4つの利点を挙げている。1つは、再話問題は作成や内容の調整が容易であり、実用性が高い課題と言える。2つ目の利点として、文章を読んだり聞いたりしたことを伝える再話行為は、学問や研究などを目的にした英語（**English for academic purpose : EAP**）学習者にとって真正性がある技能統合型タスクと言える。3点目として、受験者に共通の情報を与えることからテストとして公平性が高い課題となる。4点目として、学習者は与えられた情報から内容と表現を学ぶことができ、良い波及効果が期待される。このように、再話活動はスピーキングのテストタスクとして有効な活動であるが、タスクの特性がパフォーマンスに及ぼす影響はまだ十分精査がなされていないとしている。

再話タスクによるパフォーマンスの特性を明らかにするために、本論文は4つの研究で構成されている。研究1では、日本人大学生29名を対象に再話と要約の両課題の発話の質を、発話の複雑さ・正確さ・流暢さ（CAF）の観点から比較している。結果として、再話と要約課題はCAFの観点から発話の質に差がないことが明らかとなった。そのため、追調査として、異なる日本人大学生46名に課題の指示文に関して、刺激文の表現を積極的に使用するよう指示を与えた場合と、刺激文の表現を出来る限り言い換えるよう指示を与えた場合にどのように発話の質が変化するかを調査している。その結果、さらに異なる指示を与えても、発話の質に有意な差が生じないことを明らかにした。但し、前

者の指示群で刺激文中の表現と同じ表現を多く使用する傾向は見られたとしている。

研究 2 では、2 つの実験 (2A と 2B) によって、刺激文の提示方法・長さ・難易度の 3 要素が、発話にどのような影響を与えるか調査している。まず実験 2A で 3 要素が発話に与える影響を調査しており、長い刺激文が与えられた場合、実験参加者の発話量が増え、語彙的多様性や流暢さの指標が高まることを明らかにしている。一方、文章の難易度に関しては、語彙的多様性の指標にのみ有意差があり、その他すべてに差がなかったとしている。実験 2B では、刺激文の提示方法をリーディングさせる場合とリスニングさせる場合の発話を比較している。その結果、刺激文がリーディング形式で与えられた場合の方が、発話量が多くなり、流暢さも高まること、リスニング形式で刺激が与えられた場合は、発話の質が低下する傾向があることを明らかにしている。刺激文の提示がリスニング形式で行われる再話課題は発話を多く引き出せないことから、リーディング形式で刺激文を与えた場合よりも難易度が上がると解釈できる。よって、刺激文をリスニング形式で与える場合には、学習者・受験者のレベルを考慮した指導が必要であると結論づけている。

続いて、研究 3 では、準備時間 (実験 3A) と再話活動前の音読活動 (実験 3B) が再話課題における発話に与える影響を検証しており、このような介入があった場合には流暢さと発話量が向上することを示唆している。以上の研究 1 から 3 の結果をまとめると、再話課題における発話のうち、タスク条件の操作によって参加者の発話の複雑さと正確さは向上しなかったが、発話量には明らかな向上が検証できたとしている。

研究 4 では、研究 1 から 3 で実施されたタスクの難易度を比較することを目的に、多相ラッシュモデルによる分析を行っている。この研究では、まず、評価尺度が妥当かに関して、EBB2 scale (Hirai & Koizumi, 2013) に 0 の評価項目を追加した尺度の方がパフォーマンスのレベルの分類分けに寄与するかを調査している。結果として、オリジナルの EBB2 scale の方が評価尺度として機能することがわかったため、元の EBB2 scale を評価尺度として使用している。分析結果として、再話課題で提示されたテキストの難易度は、4 から 5 段階のレベルに分かれた。しかし、その難易度は  $-0.15 < \theta < 0.16$  と狭い範囲に収まることから、それほど大きな差はないと結論付けている。タスク条件の難易度は、リーディング (100 語程度) の刺激文が与えられる条件で最も難易度が低く、リーディング (150 語程度) 条件で最も高かった。研究 2 で使用したリスニング形式の課題は、8 種類のタスク条件の中で 3 番目と 4 番目と中程度の難易度であった。発話の質からも最も困難度が上がると予想したリスニング形式タスクが中程度であった原因として、刺激文を聞く回数が複数回であったことや、研究 2 では主に CAF の指標を元に解釈が進められた一方、研究 4 では評価者による評定結果が分析の対象であったことが起因していると考えられる。

以上の結果から、学習者・受験者の熟達度に応じて適切なタスク条件を調整することで、ある程度難易度や発話の質を変えることができるため、再話課題を技能統合型のスピーキングの課題として幅広く用いることができると結論付けられた。但し、受験者の平均能力値は  $\theta = 0$  を下回っており、タスクの難易度に比べ参加者の英語能力が低く、全体としてタスク条件・刺激の内容に関わらず再話課題自体が、本研究参加者にとってやりがいのある課題であったと判断できる。

本研究の限界点として、各実験でリーディング能力やリスニング能力、語彙力などの参加者の英語運用能力を測定できなかったことや再話課題そのものへの練習効果を完全に除外することが出来なかったことが挙げられている。

## 審査の要旨

### 1 批評

本論文は、再話課題のタスク条件がスピーキングパフォーマンスにもたらす影響について論じている。タスク条件として、刺激文の長さ、難易度の違い、課題の提示方法、準備時間の有無、事前タスクの有無、指示の与え方、そして刺激文の内容を上げており、これらの違いによって再話課題における発話の質や得られる評価にどのような違いが現れるのか、そしてそれぞれのタスク条件の難易度がどのように分布するのかを明らかにすることが本研究の目的となっている。大学入試改革において4技能試験を導入する計画や、次期学習指導要領で、英語4スキル5領域が設定され、英語による統合的授業を行う必要性が強調されていることから、スピーキングの指導のニーズがますます高まっている。しかし、スピーキング指導後のパフォーマンスの評価に関しては、まだまだ教育現場でその実施方法が模索されている。そのような状況で、実用性および真正性の観点から教室やテストとしても扱いやすい技能統合型の再話タスクをスピーキング評価として取り扱っている点は、博士論文のテーマとしてふさわしいと思われる。

研究1では再話と要約の比較を、分析に労力を要する複雑さ・正確さ・流暢さ(CAF)指標を用いて詳細に比較している。結果として、再話と要約の両課題は指示を明確にしても発話に有意な差が出ないことを明らかにした。但し、実験における時間の設定と指示の出し方には限界点もあり、再話と要約の違いを学習者が十分に理解して行ったか更なる検証が必要である。研究2では、刺激文の提示方法・長さ・難易度の3要素が、発話にどのような影響を及ぼすかを精査しており、ある程度長い刺激文が与えられた場合、実験参加者の発話量が増え、語彙的多様性や流暢さの指標が高まることを明らかにしたことは、指導に役立てることができる成果と言える。また、これまで検証されてこなかったリスニングからスピーキング型の再話課題について、リーディングからスピーキング型と比較することで、発話の質の違いを明らかにしている。結果として、リスニング形式で再話を行った場合は、発話の質が低下することから、授業でのメモ取りの訓練など、熟達度に応じた幅広い使い方が出来る教育的示唆に富む結果となっている。さらに、研究3で準備時間の影響、音読活動の挿入など、授業で実際に工夫できる点について調査しており、タスクの難易度の軽減や理解度向上のための活動として大いに参考になる。

最後の研究4では、多相ラッシュ分析を行い、総まとめとして全てのタスクの比較を行っている。ここに、項目(評価観点)を同時に組み込めばさらに詳細な観察できたと思われるが、再話のタスク条件をどのように調整すれば、発話量や流暢さを向上されることが出来るかを明らかにした点は評価に値する。以上、再話が有効なタスクとして授業に幅広く応用できるように、さまざまな観点から検証した本博士論文は、教育示唆に富み、その成果は高く評価できる。

### 2 最終試験

平成30年5月14日、人文社会科学研究科学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

### 3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士(言語学)の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。